

# デンマークの保育・教育からの学び

## —保育・教育システムと森の幼稚園—

古屋喜美代

2011年8月、私は初めて北欧デンマークを訪れる機会を得た。森と湖、風力発電の、小さな福祉国家である。国民の幸福度が高いとされる国であり、どのような理念と環境のなかで子どもたちが育っていくのかを肌で感じて見たかった。

今回は私立学校教員養成校と森の幼稚園を訪問し、保育・教育システムについての視察を行った。そこからの学びを整理し、今後の日本の保育・教育への示唆を得たいと思う。

### I デンマークの保育・教育システム

#### 1 デンマークの保育

##### (1) 保育システム

鈴木(2010)によれば、デンマークは1960年代、福祉国家として確立した。この時期、女性の就労のために保育所施設が拡充された。ただし「子育ては私的領域」に属したままであった。その後、批判教育学、オルタナティブの影響を受け、90年代にはほとんどの子どもが保育施設に通うこととなった。保育は公的機関が担う役割であるという規範が一般化したといえる。乳児期幼児期を通して一貫したシステムであり、日本のように文部科学省管轄の幼稚園、厚生労働省管轄の保育所といった区別は存在しない。2000年代から統合保育施設(0～5歳)もできている。以下本論では、保育施設について便宜上「幼稚園」の名称を使用する。

澤渡(2005)によれば、誕生から18歳まで子

どもに対して公的居場所の準備、保障がなされ、基本は自治体が運営を行う。2005年段階で、0～2歳の「乳児保育」利用率は56.1%、3～5歳の「幼児保育」は94%、3年生までの「学童保育」は80.1%の子どもが通い、4年生～中学生は「青少年クラブ」に通うことができる。学校教育は無料であるが、就学前保育は有料であり、保育料支払額の28%(幼児は26%)が親の支払いの上限額である(ただし支払額割合は適宜変更あり。子どもに対しては国からの補助金がある)。

##### (2) 保育内容(カリキュラム)

澤渡(2005)はデンマークにおける保育の特徴を次のように述べている。基本的大枠(国の定めた)のもと、各自治体ごとニーズに応じて自治体独自の保育目的を持つことが一般的である。これはDAP(document of pedagogic learning plan 教育学習計画指針; 0～6歳の年齢に応じた発達・教育指針)という。

伝統的に「遊び」を重んじ、幼稚園は読み書き習得を含む「教育」の場所ではないとされている。基本的に対話によるしつけを重視し、自律し自制心をもった「有能な子ども観」に基づいた関わりがなされる。しかし保育目的をより明確にするべきとして、「年間保育指導目的および計画書」を作成、提出することが2004より義務づけられた。

### (3) 森の幼稚園誕生の経緯

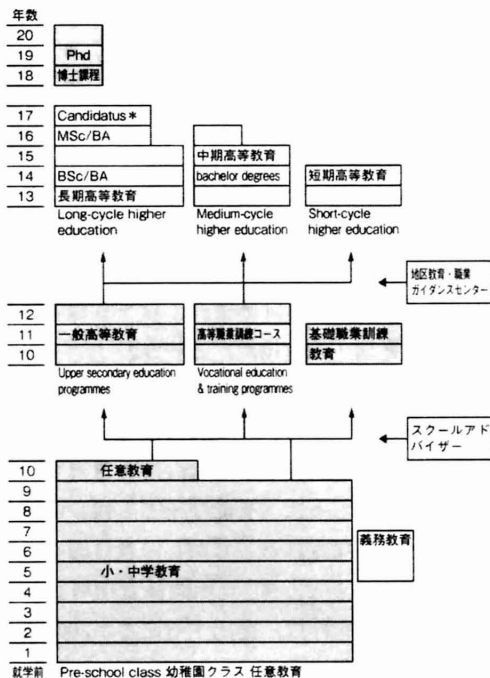
そもそも1970年初頭にグラッドサクセ市の保護者数名が、「子どもたちを自然の中で育てたい」と数人ずつ交代で子どもたちを近郊の森に連れて行ったのが始まりだという(澤渡, 2005)。その後自治体の管轄で運営されるようになり、保護者の「保育の選択肢」の一つとして拡がり、ほとんどの自治体が設けるようになっていく。幼稚園という建物があってそこで子どもたちを保育するという従来の保育と異なり、天気にかかわらず森に出かけていく。しかし実態は多様で、当該幼稚園が「森の幼稚園」と標榜するかどうかということであり、統一した概念や「森の幼稚園」協会があるわけではない。

## 2 デンマークの学校教育

### (1) 学校教育システム

デンマークの学校教育システムは表1に示すとおりである(澤渡, 2005)。

表1 デンマークの教育システム



\*一部は2年以上

Copied from Ministry of Education, Denmark, 2004

(出典: 澤渡 2005)

6歳で国民学校の幼稚園(0年生)に入学してから、義務教育(10年間)を経て大学教育に至るまで、教育費は公費で賄われる。1970年代から幼稚園組が普及し、2000年に入ると6歳児の95%がこの段階を経るようになり(小島, 2004)、2009年8月から0学年が義務化された(鈴木, 2010)。小島(2004)によると、同じ時間的リズムの中に身を置くことで、学校生活になれて、学校での共同生活に必要なルールを学ぶ。あくまで遊びを通じて自己表現力、学ぶ喜び、人の話を聴く力などを身につけていくのが主たる目的である。0年生~1, 2年生を一つのまとまったユニットとして考え、3学年の指導者が互いに協力し合って学びの流れを作っていくシステムを築いていこうとしているという。日本の移行期を考えるうえでも示唆的である。

義務教育終了後の青年期教育については、2003年報告(澤渡, 2005)によれば、高校(ギムナジウム)対象者54%、職業教育対象者36%、その他の青年期教育対象者7%である。デンマークの若者は大学に入るのが遅く卒業までに時間をかけるため、労働市場に入るのは30歳近くになる。これに対して、国は早期就職を促す政策を実施している。たとえば、高卒後2年以内に大学に出願するなら、高校の卒業成績を1.08倍とするなどである。就職するのが遅ければその分労働市場に貢献する期間が短縮し、税収が減少するため、ストレートで進学・卒業することを支援する政策が次々提唱されているのだという(鈴木, 2010)。18歳以上の教育下にいるものに対しては、教育支援制度SU(奨学金)が充実しており、学生は国からの経済支援を受けて学修する。

### (2) 教育内容

デンマークは、世界でも学校教育に対する公的支出の高い国である。にもかかわらず、OECDが実施するPISA等において、生徒の成績は芳しくない。もともと「周囲との協働、問題の所在を明らかにする、教科・分野を超えて

ものごとを文脈に位置付ける、それを日常生活と結びつけること」を重視してきており、こうした力はPISA調査では測れないとされている。試験が行われ、数値化されるのは、国民学校8年生からである。大学については、高校卒業試験の点数を提出し、入学資格点数との兼ね合いで大学入学許可／否の通知がなされ、いわば自分との競争である（澤渡，2005）。

しかし現在では、国の方針は教育分野で国際競争力を挙げることに熱心に取り組むことに大きく転換している（鈴木，2010）。

### （3）問題状況と課題

デンマーク社会の持つ「個人の自由の尊重と自立した市民」という考え方は、人をありのままに受け入れる寛容さと同時に脆さをかかえている。これが結果的に、人々・若者の放擲を招いたという批判がなされ、新自由主義、新保守主義の波が強まっているという（鈴木，2010）。

中等教育で中途退学率が高いこと（15%）は大きな問題である（澤渡，2005）。教育程度と肥満，社会問題には関係があるとされ，子どもの肥満，アルコール・薬物乱用が社会問題となっている。

中等教育ドロップアウト若年層の多さに対して，澤渡によればスクールアドバイザーの専門職化などが行われている。2004年より，スクールアドバイザーは学校長管轄から教育省管轄に移行し，数校を兼務し，子どもたちに進路・職業教育（6～9年生まで）を専門に実施している。

## 3 デンマークの職業教育

デンマークの職業教育について，鈴木（2011）は以下のように紹介している。

### （1）職業教育のシステム

デンマークは，いわゆる「学力」より「実践的応用力」を大切にする文化的歴史的土壌があり，理論と実践を往還するデュアルシステムを重視してきた。

### ＜中等教育＞

職業を見据えた進路選択のため，中等教育は2つのラインに分かれる。

#### ① 高等学校

#### ② 職業学校

職業学校では手に職をつけることを目指す。他に，25歳未満の中等教育を終えていない青年に対し「生産学校」がある。これは中等教育終了にはならない。

### ＜高等教育＞

#### ① 長期 学士3年＋修士2年

#### ② 中期 3年半から4年

中期の職業大学（職業学士）では，小中教員，看護師，保育士，理学療法士，ソーシャルワーカー，エンジニア，助産師，手話通訳者などを養成する。

職場での実践と学校での理論のコンビネーションで，約4年間にわたっての教育を受ける。実習は労働力として働いているので，雇用主から実習生賃金が払われる。一般より低賃金だが，理論教育の期間はSUを申請できる（澤渡，2005）。

「保育士養成大学」を例にとると，乳幼児保育士，学童クラブ・青少年（青年）クラブの余暇生活指導士，社会教育士の3種のペダゴギーを育成する（共通の免許）。3年半のうち，1年生12週，2・3年生26週の実習を行い，2・3年生時には給与がある。実習は学校によって週数に違いがあることもある。3年半の後に，卒業プロジェクトが課される場合がある。

#### ③ 短期 職業アカデミー2年間

歯科衛生士，簡単な技術者の養成であり，実習先は実習生賃金を支払う。

### （2）成人教育

成人してから，職業人になってからも，デンマークでは継続教育を受けるシステムが整っている。2010年1月全国13か所に成人継続教育センターが設置され，職業教育訓練とも共同しながら基礎レベル成人教育をワンストップサービ

スで提供できるようになった。

今回の視察においても、保育士が継続教育を受けることが話題となり、キャリアアップ、生涯教育の視点の浸透を感じさせられた。

## Ⅱ デンマーク視察内容と今後の保育・教育への示唆

### 1 私立学校（フリースコーレ Den Frielererskole）教員養成学校

#### （1）学校の位置づけと資格

デンマークの学校の基本は国民学校であるため、私立学校はオルタナティブとしての位置にある。訪問した学校は、デンマーク唯一の私立学校（フリースコーレ）教員養成学校である。この学校では理事会が校長を雇用し、校長裁量でスタッフの雇用、養成内容の決定を行う。都市部から離れた場所にあり、240名の学生のうち180人は寄宿生である。

学生はフリースコーレで教える免許を取得するが、国の定める教員免許ではない。国民学校で教えられるかどうかは自治体によって異なる。5年間の教育課程で、1、2年次に3週間の実習、3年で最低6か月教職員として実習（給与あり）を行う。この長期実習の11月頃、中間報告セミナーが1週間ある。4、5年では実習はないが事後の振り返りを行う。学士号は出していないが、一般的社会的地位として大学学士号に相当する。フリースコーレ、エフタースコーレ等において、この学校の卒業生の地位は高く認められているという。人数は少ないが、編入の形で公立の教員養成大学からこの学校へ学士入学してきた学生もいる。フリースコーレ等は教員資格がなくても教師として働くことができ、フリースコーレ約500校中5%、エフタースコーレ260校中30%がこの学校の卒業生であるとのことであった。

小島（2004）によれば、エフタースコーレとは義務教育終了後の10年生教育であるが、取っても取らなくても自由な学年である。成績の悪

い生徒のために用意されているといったものではない。自分の将来進む道が定まっていな生徒に、探索の時間と機会を与えるものである。いわば充電期間にあたり、エフタースコーレは自然環境のよい田舎にある全寮制の学校である。15歳という思春期真っ只中の若者がコミュニティ生活を通して貴重な学びを経て、次のステップに進むエネルギーを蓄える場となっている。

#### （2）教育課程

教育課程の背景には、成人の若者たちへの啓蒙教育を提唱したグルントヴィの思想、デンマークデモクラシー、参画の考え方がある。それはデンマーク社会全体の基盤にあると考えてよいとのことであった。学校長は、教育課程で大事にしたいこととして、以下を挙げている。

- ・それぞれの学生の人格の尊重
- ・プロフェッショニズム
- ・共同参画：それぞれのリソースを共有する
- ・コミュニティの生活
- ・文化的生活
- ・外に出ていくことの支援
- ・外部者受け入れの支援

教育課程の特徴は以下のような点である。

##### ① 必修科目

「コミュニティ（歴史を通して）」「言語（メディア・テクノロジーを含む）」「イデア（思想、宗教）」「バランス（調和・協調）（自然科学・現実事象を通して）」

##### ② 学科のなかでのコラボレーション

相互交流のなかで別の答えが生まれてくることを大事にする。

##### ③ 「物語」という学科（narrativity）

詩、口承：聞き手がそれぞれの受け止め方、理解をしていく。ファンタジーを解き放つことが重要である。

学内、キャンパスを案内してくれた女子学生は、3年間公立教員養成大学で学んだ後、理念に物足りなさを感じてこの学校に4年次から学士入学してきた。彼女は初等教育3～6年生の

教育に関心があるが、学生の中では10年生（エフタースコーレ）教育担当希望者が多いという。

多くの学生が寄宿生活を送ることに加え、昼食は全学生が一堂に会して共にする。食後に学生ミーティングが自由な雰囲気で開催され、民主的な雰囲気が醸成されている。かなり市街から離れた立地であるため、キャンパス内にバー（学生たちが穴を掘って作ったそうである）もあり、息抜き場（ゲームなど）もある。学生生活自体が民主的コミュニティを体感するものとなっており、コミュニティを大切にす理念を実践している。この学校の教員の多くは近郊に住んでおり、学生と教員、学生同士が近い関係を築いているようであった。特にエフタースコーレは寄宿生を基本とするので、教育指導者となる学生たちにとっては必須のコミュニティ体験であることが窺われた。

### （3）今後の教員養成への示唆

デンマークの教員養成が3年半あるいは4年の養成期間であるのに対し、この学校での教育期間が5年間という修士レベルの時間を要することは、世界的な趨勢と同じ方向にあるといえよう。教員という社会的地位を上げていくことは、社会による学校教育のバックアップという意味で重要であり、修士レベルでの教員養成は一つの方向性である。

職業教育が重視され、理論と実践の往還というデュアルシステムの伝統があるゆえに、1年次という早期からの現場実習が可能である。そして、長期実習は教員養成の核となっている。日本の教員養成においては、デュアルシステムの伝統基盤を持たないため、そうした基盤作りを視野に入れて、今後の長期実習の方向性を検討する必要がある。

## 2 3園のデンマーク森の幼稚園

幼稚園の多くは公立で、民間園は少ない。森の幼稚園は親にとって人気はあるが、全体の1部であり、デンマーク幼稚園の主流を占めるわ

けではない。日本の幼稚園と比べれば長時間保育になるが、保育料は他園と同額である。幼稚園が地域支援まで担うという要請はないが、自治体の「子どもの参画」という意識は強い。

現在財政緊縮改革が強まっているため、各幼稚園はドキュメント（証拠）で財源の必要性を訴えることが必要になっている。デンマークの子どもの学力は低いというPISAの結果を受けて、自治体は保育目標を押さえて保育を実施している証拠提出の要請を強めている。保護者に対しては、幼稚園は毎日の子どもの様子を伝えるために文書・写真を掲示板にはり、保護者が確認できるようにしている。登降園時には母親だけでなく父親の姿も多く、父親がのんびりと保育者と立ち話をする姿が印象的であった。

デンマークの場合、日本でいう保育士、幼稚園教諭の区別はなく、学童保育指導員も同一資格である。3年半の職業学士として免許を取得する（1992より）。実習は1年後期に16週間（多くの学生はSU（奨学金）で対応）、2年と3年に半年ずつ行う。半年実習の際には給与がある。実習先は大学が確保するが、実習生を必要とする幼稚園は多いので問題は少ないようである。

以下では、2011年8月に訪問したデンマークの「森の幼稚園」と称する園3か所の状況を叙述しながら、保育の共通性と個別性を検討したい。

### （1）立地と森の場所および制度面

ほとんどの幼稚園は自治体管轄であり、国家補助を受けている。シュタイナー系幼稚園のような民間幼稚園の数はごく少数である。しかしどこも親中心に幼稚園が作られる伝統がある。自然の中で子どもの育成が求められたことと同時に、現実的問題として、都市部には空間的場所がないことも「森の幼稚園」が形成された一つの大きな要因である。バスで1時間もかかる場所から、すぐ裏手にある森まで、その形態は条件によって全く異なっている。

① Adelgaarden幼稚園 (以後A幼稚園):  
首都コペンハーゲンの中心街に位置する  
統合幼稚園 (乳児から就学まで)

この幼稚園はビルの建物のなかにあり、10月から2歳10か月まで36人、3～5歳50人で、入園児童は増えている。庭のない市街の敷地だけでは到底対応しきれないこともあって、8年前に「森の幼稚園」を開始した。週4日保育であり、3歳以上の子どもたちが毎日片道1時間かけてバスで郊外の自治体所有の森に出かける。8時半に出発し16時ころ園に帰着する。

森は自治体所有であり、近隣住民と話し合いが整ったうえで開設している。周囲に深い森が広がるが、当該場所は半人工的に切り拓かれた冒険あそび場といったものに近い。3つに区分けされ、共同で使用する広場もあり、自治体にある3幼稚園がやってくるようになっている。森というより広い公園のようであり、ふんだんな自然のなかに、遊びの小屋があったり、築山があったりする。専用の保育室、給食室などを完備し、森現地には給食スタッフ1名がいる。

② Børnehuset Højmarksvej幼稚園

コペンハーゲンから離れた Søborg市に位置する幼稚園 (以後B幼稚園)

自治体担当者イボンヌおよび園長ドーテと面談し、子どもたちが遊ぶ森のなかを案内され、散策した。夏休み明けで、森の小屋の使用準備を行う日であり、子どもたちは森には不在であった。

この園は町の幼稚園と森の小屋からなる。町の幼稚園 (3～5歳) にも園庭があり外遊びができるようにはなっている。15年前 (1993) に自治体として入所児童数が増加することに対応する必要性が出てきたため、「森の幼稚園」を開始した。ボーイスカウト使用の森の小屋を自治体が使用契約している。町から小1時間はかかるであろうか、かなり離れたうっそうとした森のなかに位置する。「森の保育士」を雇用 (1人/子ども7人) し、この14年間1名の男性保育士が勤務してきた。今回新たな男性保育

士に変わるという。特別な資格を持つわけではないが、森に関する知識や関心があることが望ましいし、動物の皮剥ぎなど特殊な資格を身に付けるため生涯学習を重ねることもあるという。

森の急な小道を分け入るように登った先に小屋があり、小屋の周りには熟したベリーがたくさん落ちていた。山道を歩くと焚き火の場所があり、そこで子どもたちは食事をとることが多いのだという。雪が多いときは小屋のなかで木工をしたりして過ごす。1度に7人という子ども数なのでゆったり対応できるようである。1、2時間の山道があり、しばらく行くと美しい湖 (沼) が出てくる。春には小さい蛇がたくさん土手に上がってくるという。子どもたちはそれを素手で捕まえて遊ぶという (噛まれても大事はないとのこと)。まさに子どもたちが森そのものにどっぷりと浸かれる環境である。

緊急時のことを考えると大人1人という問題点があり、2010年度から同一自治体の他幼稚園も参入するようになったという。つまり7人の子どもを連れたグループが2グループあれば、大人が2人以上いることになり、緊急時に協力して対応することができるということである。

③ Rudolf Steiner Børnehaven

Rønnebarhuset幼稚園

コペンハーゲン郊外のHolte市にあるシュタイナー系森の幼稚園 (以後C幼稚園)

幼稚園の周辺に森があり、園庭にもうっそうとした茂みがあって十分に遊べる環境である。小さな家のような民間幼稚園であり、理事会がスタッフを雇用し、エヴァ園長と保育士3人で運営する。森までの移動時間はなく、立地条件としてはA、B幼稚園に比べて恵まれている。両親の運営への参加は活発で、週末は両親が交代で幼稚園清掃を行っているという。

訪問した日は、普通の家庭の台所のような場所でボランティアの母親がおやつのお好み焼きのようなものを焼いていた。こじんまりとした、非常に家庭的な雰囲気の場所である。ボランティアは定期的に入ることが前提である。

## (2) 森の幼稚園の保育目標

上記で見たように、子どもたちが遊ぶ「森」の条件は各園で大きく異なる。だが、そこでの保育目標については共通したねらいが見てとれる。以下で整理してみることにする。

### ① 子どもの総合的発達と自立をめざす

A、B幼稚園は公立園であるため、自治体の定める学習内容を踏まえる必要がある。カリキュラムは、DAPに基づく。DAPは自治体所属の教育コンサルタントによって作成されるようである。

A幼稚園では『総合的発達、言語、社会性、自然、身体・運動、文化・文化的表現』の6領域にそって保育計画が立てられる。保育目標（フォーカスポイント）として毎日一つは領域内容を取り上げていくとのことである。「社会性」は特に力を入れており、ネゴシエーションごっこ、生命についての学び（自然領域）などを重視している。B幼稚園は、日常保育では、各保育士が毎日対象児を1名選択し、日々の保育目標を設定する。保育目標は、職員、保護者が確認できるように掲示されていた。

いずれの幼稚園も、保育目標にそった保育計画、実施の経過をデータとして残しておくことを重視する。記録、写真等によるポートフォリオを実施し、保育成果のエビデンスとしていた。

民間のC幼稚園は、シュタイナーの思想を背景に子どもの自立をめざす独自の保育目標をもつ。カリキュラムについては、子どもが自立的に行動しやすいように、安定した分かりやすい枠組みをつくることを重視している。曜日ごとの週案が決まっており、一日の生活のリズムもほぼ一定に決まっている。

### ② 感覚統合教育

自然のなかで、天候にかかわらず（雪であろうと）外遊びをして過ごしながら、身体機能の向上、自然な好奇心を育てることを目指す。ただし環境条件や保育の考え方から、どの程度子どもたちの森体験を保障するかは園によって大きく異なる。自然の四季、植物、動物への関心

と死との出会いが大切にされ、自由な好奇心を展開すること、自然に対する知識を身につけることが目指されている。

A幼稚園によれば、デンマークでは肥満児の問題があるが、当該園ではそうした問題は生じないし、発達が遅れ気味の子どもの身体が育つ中で発達課題を乗り越えていけるという。B幼稚園も同様に、運動を意識しなくても森のなかでの生活が子どもたちの身体を解放し、結果として身体がしっかりと作られることになるという。

C幼稚園は、シュタイナー教育の中核である感覚を拓く教育を重視している。オイリュトミー（リズム、身体の解放）、美しい色使いや素材を重視した保育環境のなかで、子どもたちの感覚を豊かにしていくことを心がけている。絹、綿、木等々、素材の美しさと暖かみが保育室にあふれ、本物の素材と触れる中で子どもの感覚を豊かに磨いていこうとする。たとえば食器はすべて陶器であり、森に出かけるとき持参するコップだけが唯一のプラスチック製品である。A、B幼稚園と異なり、自然と子どもたちの出会いの後に知識を持ち込むことに懐疑的であり、学習の活動は行わない方針である。大人は、説明ではなく、モデルとなることを強調する。一般的に、大人は説明して理解させようとする傾向が強すぎる。知性化しようとしすぎる弊害が大きく、そのようなことは避けるべきであるとしている。そうした意味でも、そばにいる大人の健康性が大切である。

### ③ 責任感の育成、共感能力の育ち、コミュニティへの貢献

社会性、自立など、様々な語られ方がなされるが、基本に他者とよりよい関係性を結べる力の育成が目指されている。コミュニティを重視し、社会はその一員となっていく者として子どもたちを捉えている。そうした考え方が保育の根底を通底している。



## (3) 保育方法

森の立地条件の違いに応じて、保育方法・形態は3園で大きく異なる。しかしながら、自然と触れ合い、偶然の出会いから子どもが学びを広げることを目指した保育方法であるという共通性がある。以下に各園の保育形態を示す。

## ① A幼稚園：年齢を基本に、年長年少グループに分けての保育

子どもの発達に合わせたチャレンジをさせていく。外遊び経験の少ない転入児など、成長の度合いを配慮しながらグループ分けを行っている。幼児50人に正規雇用保育者8人（男性保育者4、女性保育者2、資格のない女性保育者2）と園長が森に同行する。

訪問日は夏休み明けということもあって子ども数が少なく、保育者は5名であった。行きのバスのなかで職員打ち合わせを行う。天候、子どもたちの様子やムードを総合しながら保育を組み立てる。基本的には自由な遊び主体だが、焚き火をしたり、大きな線路を用意したり、大人がイニシアチブをとってチャレンジを持ち込むことはある。3歳からナイフなど自由に使い、木工的な遊びは頻繁に行っている。年長児から年少児へのナイフの使い方の伝授などは自然に生じている。

## ② B幼稚園：4歳児を対象とした森の小屋体験

町での生活と森での生活を交互に組み合わせた保育方法である。町の「子どもの家」はコーナー保育主体で自由に遊ぶ。「森の幼稚園」は4歳児を対象として3グループに分かれ、1グループ（7人）ごとに森の小屋体験をする。6週間当たり2週間ずつ、1年間に渡って森体験をすることになる。町の「子どもの家」と「森の幼稚園」は、保育内容で連携をとりつつ展開する。「森の幼稚園」専従の保育者が1名いる。

森での体験をベースに、町の「子どもの家」で動物についてのワークショップを実施したりする。たとえば希望する子どもたちは、死んだリスの解剖体験をしたり、皮をはいて壁に飾る

などの活動に取り組む。

5歳児は3日間の休暇キャンプがあり、森の小屋で宿泊体験をする。4歳の時に馴染んだ森であり、懐かしい記憶が残っているなかでの楽しい宿泊体験となる。森での経験を題材に、子どもの発達に合わせた長期プロジェクトを行うということであった。

## ③ C幼稚園：日常的森体験

1日のリズムは安定的であり、9:00までに登園（7:30から可能）、13時～15時に迎えとなる。B幼稚園が登園時間など柔軟対応している状況であったのに対し、安定した生活リズムを作ることが子どもの心理的支えになると考えている。

地の利から、気軽に森の散歩に出かけられる。希望者は、毎日午前中2時間半森へ行き、遊び、さまざまな素材を持ち帰る。夏はなるべく皆で森へ出かける。表2のようにほぼ一定のサイクルで毎日の日課が流れていく。子ども自身は日課を理解して、主体的に生活できる。そのなかで、自然との出会いが様々な偶然の出会いを生み出していく。

森におもちゃは持っていかず、子どもたちは自由に遊ぶ。季節のこと、森のこと、狩り、釣り、ままごとなど、行為のプロセスそのものを楽しめればよい。主体的に子どもが動く、そこに大人が寄り添うということが重要だ。「目標

表2 C幼稚園の日課

時間	内容
9時	登園・唄
午前	森へ（希望の子どもたち） 帰ってきて手遊び
昼	食事 素話（民話・おとぎ話）
午後	希望があれば再び森へ
13時～15時	順次降園



に向かって」という意識は大人のものであり、知育重視は有害と捉えている。

#### （４）森の幼稚園についての総合考察

今回森のなかでの子どもたちの様子を観察できたのは、A幼稚園の子どもたちのみであった。深い森のなかというより、冒険あそび場の環境であるが、そこで子どもたちの様子を描いてみよう。そのうえで、様々に模索される森の幼稚園の実践が子どもの成長においてどのような意味を持つのかを考えたい。

薪小屋のあたりでは焚き火が燃え、薪小屋の隣には子どもたちの遊びの基地になるような木小屋がある。子どもたちは自由に枝を拾ってはナイフで削り、鋸で枝を切る者もいれば、木小屋でままごとを展開する子どもたちもいる。3歳の年少児でもナイフや鋸を自由に使用している。太い木々の間に細い板とロープが張られ、子どもたちは綱渡りのように中空の板をわたって遊ぶ。自然を利用して、ちょっとした遊びの素材をあちこちに用意している。どれを選ぶか、何を使って遊びを作り出すかは子どもたち自身が主体的に生み出していく。築山があればかけ上るのが子どもであり、3歳に満たない子どもがよちよちながらも築山を一人よじ登り、かけおける姿があり、大人の賞賛がそこになくても十分満足な様子であった。さまざまな木の実がなり、食べてよいものを先生に教えられ、子どもたちはその実を食べていた。

死んだハクチョウが板に貼られていたり、プラスチックのショーケースのようなところに哺乳類の骨が入っていたりする。それらはすべて子どもたちが見つけてきた動物の死骸だ。ショーケースの骨はキツネだそうで、見つけた死骸をケースに入れておくと、徐々に腐敗していく。そうした過程を含めて子どもたちが実験的に観察していくことになるのだという。森の家の室内には、子どもたちが見つけた動物の骨や木々が様々に集められ、天井のネットに飾られるなどしていた。

三輪車などを乗り回せる運動場やタイヤブランコなどの固定遊具もあるが、非常に広い敷地のなか、人造物よりも自然の素材を使った遊びが主となっていた。こうした自然との接点の豊かさが子どもたちに何をもたらすのか、大人自身がどう存在し役割を果たすのか、考えてみよう。

#### ① 自然のもつ大きさと意味の多様さ

自然豊かな環境のなかで、子どもがどのような出会いをするかは全くの偶然の所産ではない。子どもたちに経験してほしいこと、より関わりやすい手がかりを大人たちは考え、用意している。A幼稚園の場合であれば、焚き火や木小屋、使いやすいナイフや鋸の小道具、アスレチック的な仕掛けなどである。B幼稚園の場合も、探索の小道に誘い出すのは大人であり、その散策を選択すること自体が大人の思いである。

しかし、自然のもつ力は大人の想像をはるかに超えるし、子どもたちの自然とのかかわり方は多様であり、大人の想定範囲にとどまるものではない（河崎，2011）。それゆえ、四季折々の素材と出会いながら子どもが主体的に好奇心を発揮し、主体的にチャレンジしていく、それに寄り添うのが大人の役割だといずれの幼稚園も考えていた。こうした自然との関わりには多少のけがもつきものであることを保護者は理解しており、チャレンジ的保育内容を受け入れている。基本は「子どもを尊重する、信頼する」ということだと捉え、子ども自身が自分の行動に責任をもつという姿勢を保育者と保護者が共有している。実際のところA幼稚園が森の幼稚園を開始して8年間で、これまで大きなけがはほとんどなかったし、保護者からのけがに対するクレームもないとのことである。

自然の環境には多様な生き物が存在する。四季折々の草花、木のみ、熟したときに口にする果実、昆虫からナメクジ、ヘビ、そして鳥やキツネといった大型の動物までがそこで生命を営んでいる。特に大型の動物の死との出会いは、自然の中での生命の営みの大きさへの気づきに

つながる。そこから科学的態度や思考に広がっていくこともある。このとき子どもたちは、自然に対する畏敬を感じながら動物の生態や生命についての客観的知識を身に付けていくことができる。経験と知識が乖離した知育偏重とは対極にあると考えられる。

日本の都会ではせいぜい虫の死骸程度で、鳥や哺乳類の死骸を扱うことはまずできない。動物（飼っていたウサギなど特別な関係にある動物）の死と直面する場合、埋葬し葬式をするといった方向に進むことが多いのではなかろうか。自然の法則と現象にそのまま向き合わせようとする、あるいは科学的思考の土台とするといったデンマークの生命に対する向き合い方は生命に対するダイナミックな視点に立つといえよう。

#### ② 大人は子どもにとってのモデル

食事、おやつのような生活の枠組みは、子どもたちが時間の見通しを持って生活の主体となるうえで欠かせない。その枠組みは大人が用意するものであるが、その合間の遊びの時間は子どもの主体性を重視し、大人は子どもの遊びの展開に寄り添いつつ子どものモデルになっている。

そこで重要になるのが、遊びのなかでの大人の柔軟性であろう。自然の大きさ、多様性により、大人の想像を超える子どもにとっての様々な出会いが生まれうる。そのとき大人が心から驚き、感動しながら、大人自身の好奇心が発揮されることこそが、子どもの好奇心の発揮を支え、促すことになる。心が動くような感性がなければ、子どもにとってのモデルにはなりえない。モデルにならない大人は単なる見張り番のようなものである。これでは保育士の専門性は不在である。そうした意味で、C幼稚園では「大人の健康性」ということを強調していた。

大人が子どもの科学的態度を導く働きかけを行うかどうかについては、幼稚園によって考え方が異なっていた。A、B幼稚園では積極的に科学的思考に結び付ける取り組みがなされていた。B幼稚園では、希望があれば死骸を解剖す

ることもあるという。4歳児段階での自然体験をベースに、5歳段階で課題を意識したプロジェクトを行うという。A幼稚園のように、死骸の時間経過を子どもたちに目の当たりにさせるということは、私にとっては予想外の対応であった。だがそこには客観的事実を目の当たりにしながら、生命サイクルに触れ、気づきを促したいという大人の思いがある。一方C幼稚園は、幼児期段階では知性化しようとする弊害は大きいとし、説明して理解させるような取り組みには否定的であった。幼児期では、子どものファンタジーに寄り添いながらこれを広げることを最も重視するとのことであった。

#### ③ 大人の技量のスキルアップ

デンマーク社会では、職業人になってから継続教育を受けるシステムが整っている。B幼稚園では、森の保育士が皮のなめし方についての学習を継続教育として受講した話があり、生涯にわたり職業人としてのスキルアップを図るといったことは一般的なことである。「森」という大きな自然と向き合う感性を磨くこと、様々な偶然性に対応する技量を身に付けておくこと、そうした力量は必ずしも初めから求められてはいないが、職業人としての成長過程で社会的ニーズとしてあるということである。そしてデンマークは生涯にわたるスキルアップが可能な社会である。個人の努力だけに帰されることなく、社会が大人自身の職業的成長をバックアップするシステムをもつことは、保育士が成長を続けるための大きな基盤となると考えられる。

#### ④ 空間的制約を乗り越える一つの選択肢

元々自然との触れ合いのなかで子どもたちを育てたいという親たちのねがいから実現された「森の幼稚園」ではあるが、現実には、待機児童を受け入れるために空間的な保育環境が手狭になり、なんとか空間的問題を解決しなければならぬという切実なところから「森の幼稚園」への転換がはかられた場合もある。

現在日本の都心部における保育所、さらに学童保育所（放課後の小学生の保育施設）におい

でも同様の問題が生起している。特に学童保育所においては、1施設70人以上の子ども数は生活の場として不適切であるため、文部科学省としてもそうした大規模学童保育所に対しては補助金を削減するとしている。つまり生活の規模としての適性規模、それにみあった空間的環境の保障が必要だと考えられている。しかしながら、現実には待機児童を解消するために大規模学童保育所が多数存在している。しかも子どもたちの保育所へ帰る時間がばらばらであることから、外の公園等への外出も難しくなるなど、外遊びは減少傾向にある。こうした限られた環境のなかでの集団保育は、子どもたち一人ひとりにとっての安心できる居場所となること、集団保育の良さを活かした保育展開を行うこと、といった事柄を非常にむずかしくしている。

それぞれの保育所には固有の問題があつて、それぞれの条件のなかで考えていくしかない。その時に子どもたちを預かることに汲々としてしまう状況を打破するために、保育環境そのものを斬新に変革していくことも視野におく必要がある。常識にとらわれない試み、自然の力を何とか生活の中に取り込む努力を積極的に行うこと、そうした点は日本の保育の今後を考えていく上で示唆に富むと考えられよう。

---

## 引用文献

- 河崎道夫 2011「ごっこ遊びをおもしろく豊かに」(第3回)『現代と保育』81号, pp138-159 ひとなる書房
- 小嶋ブンゴード孝子 2004『福祉の国は教育大国』丸善ブックス
- 澤渡夏代ブラント 2005『デンマークの子育て・人育ち』大月書店
- 鈴木優美 2010『デンマークの光と影』リベルタ出版
- 鈴木優美 2011「デンマークの職業教育・訓練」『教育』2011年4月号, pp44-52 国土社